

漱石の女性研究

Junko Higasa

漱石は「俺は成し遂げなければならないことがあるから、お前に構っている暇はない。心得ておけ」と関白宣言をして結婚した。鏡子夫人も「承知しました」と心得た。漱石は文明が東洋から西洋へ移りゆく狭間の人間である。妻は夫に従うのが当たり前の状況で育った。だが大人になって西洋化した社会へ飛び出してみると、自分が思っていたのとは大分違うなと気づいた。旨いものが食えて、きれいな着物が着られて、楽しく過ごせると思っていた世の中ではコセコセした同性の輩と戦わなければならないし、初々しいと思っていた娘の恥じらいは結婚と共に消滅する。想定外の事実で漱石は戸惑った。今まで描いていた女性のイメージと現実は一致しなかった。女ってどうしてあんなに変化するのだろうか。あの可愛さはどこへ消えてしまうのか。そんな漠然とした意識を内包したまま、ロンドン留学中に女性の結婚を論じた本を読んだ。これだ。そこから漱石の女性研究が始まった。その本には人間性に関係なく、全ての女性に備わっている「女性」特有の資質が書かれていた。著者は「女の涙には真実の涙と嘘の涙がある」と記述する。嘘の涙は男を騙す涙。しかし女は騙そうと計算して泣いているわけではない。女自身も芝居をしている自覚がない。それは深層心理が自然に泣かせる「無意識の偽善」だ。それを行なえるのが女というものだ。成程。そういうことか。それなら自分は様々なパターンの女性にその共通する特質を描いてみせる。

漱石は正にさまざまな女性を描いた。金と美貌と俄か学問を備えて名誉ある夫を得ようとする『猫』の金田富子と『虞美人草』の藤尾。『坊っちゃん』で策士の赤シャツを選んだ独走的立場のマドンナ。『草枕』で最後によりやく元亭主に対する愛情を露呈した那美さん。『三四郎』『それから』『こころ』で男に競争心を無意識に起こさせる女たち。究極は自分の愛のステータスのために完璧と見える計算をして所有欲と真実の愛を混同する『明暗』のお延。このように様々な角度で、漱石は女だけが行なえる無意識の芝居を描いた。それは個人の状況・時代によって変幻自在に演じられる。男はそれを女に備わった自然として受け入れなければならない。結果として先の書に記されたソクラテスの「女性の意思を管理しようとするのは無謀な計画なのだ」という結婚論に結びつく。そこで最初の問題に戻る。女ってどうしてあんなに変化するのだろうか。あの可愛さはどこへ消えてしまうのか。だがそれはもう考えるに及ばないテーマである。男は「女が男を自由に繰って消耗させる」結婚生活をどう送るべきか考えなければならない。「結婚は最初が肝心だよ」という漱石のアドヴァイスは、いかにも尊厳が失われかけながらも家長制度が存続していたこの時代の男らしい。

漱石は社会・家庭の様々なストレスを日記や手紙に吐露した。その中に「うちの奥さん人間だと思われたい」という言葉まで出てくる。だが実はロンドンから妻を恋しがったように夫婦愛というものは他人には計り知れないものである。漱石が一連の小説で出した結論は女性の「無意識の偽善」に対する非難ではない。それが必ずしも悪意から出ているとは限らないという理解である。身の丈を知った寒月君。女への愛よりも男の友情を選んで真実を失った罪を背負う男たち。女の技巧を巧みにかわした津田。今や男も女も結婚に向かう勇気とエネルギーを持ってない時代となった。(2013.4.21)